

必要な医療受けられず人が死ぬ。そんな政治変えたい



訴える高岡直子さん＝9月19日、国会正門前

政治考

いまでも続く新型コロナウイルス危機。目前に迫る総選挙は、国民の命を守るため政権交代を実現する選挙です。

◇ 「目の前で人が溺れているのに助けようと船も出さない。そんな冷たい政治家に任せていては、いずれこの国全体が溺れてしまう」 「次の選挙は私たちが私たちの手で、私たちの命を守る選挙です」

安保法制強行から6年となった9月19日の国会前。「安保関連法に反対するママの会」の高岡直子さん(医師)はこう述べました。今年5月、北海道で起こった医療崩壊で支援に向かった高岡さん。訪問診療で酸素飽和度86の60代女性の救急搬送要請が断られ愕然

命守る選挙 政権合意に希望

としました。20年の在宅医活動で初めての「ありえない」経験でした。東京の医療崩壊に備える「診療経験」のつもりだった高岡さんは「考えが変わった」と語ります。「絶対にオリンピックを開いてはいけません。医療崩壊を起こさせてはならない」と。

7月、政府は五輪開催を強行。感染爆発を起し、臨時医療施設の準備も怠って、無残な医療崩壊を引き起こしました。「在宅療養」は全国で13万5千人に拡大し8月の在宅死は2500人に。「必要な医療を受けられず人が死んでいく異常な事態を二度と許さない。そういう政治を変える選挙です」

日本共産党と立憲民主党が9月30日に政権協力で合意しました。「自民党総裁選のニュースにうんざりしていたところに、政権交代の予感をもたらす希望の知らせ」と高岡さん。「命を守るためコロナ政策を転換し、人が普通に食べられて普通に暮らせる政治に変えたい」と語ります。

(2面につづく)

貧困と格差放置 ■ 女性にしわ寄せ ■ 業者を追い込む

政治者

一面のうらみ

群衆沖繩臨床研修センターの徳田安徳医師(同センター)



「一環」は「F0」検査の抑制、原則自治体職員方針、O・T・O・トラベル事業、五輪開催。この四大失策が国民意識総選挙の4候補の誰かが反省してこなかったと指摘します。

「コロナ感染は、格差を反映した。徳田さんはこう述べ、鋭く言います。

「自派者組織などで働くエッセンシャルワーカーは、社会的に疎視され、人が多く、リスクにさらされて十分な保護も受けられない。家庭内感染でも、低所得者は狭い環境で家族に一気に広がる。大きな家で家庭内隔離が可能なのに経済的バックグラウンドが異なる。貧しい人は検査も受けられず、病状も受け付けず、貧困が命の格差につながっている。政権がこうした問題も放置した」

使ひ捨て

「コロナ危機のもと、大規模な非正規雇用の使ひ捨てが進みました。中でも女性、非正規労働者へのしわ寄せ

せが大きいなっています。正規・非正規の格差は正や非正規賃金引き上げなどに



取り組む運動団体「エキタス」の藤井久美子さんは「会社は人を数字でとらえていて、一人頭(正規)は『1』で派遣やアルバイトは『0.5』と数えられる。数字だけで見ているから簡単に切り替わって切り替わります。」「給付金の10万円も、市里からの奨励金が減るやチキヤネットや働きおろし、野郎が波及してやっ。給付が決定してからでも、配布が遅延した上、一回きり。家賃1万円分でもなりました」

4回の緊急給付金で特別給付金も特給化給付金も一回きり。コロナ危機であることが認められなかった。競争と自派任の新しい選挙政治のあらわれです。藤井さんは「仕事がなく生活できない、お金が入ってこなくて治療も続けられないという市民の声を政府には金へ聞かしてない」と憤ります。

大阪でシントルマサーの支援を続ける寺内順子さん



国民軽視の政権代える

シンクスを困難家庭に送っています。

昨年2月まで送付数がひと月あたり60件だったのが、コロナ危機の1年半で3倍に増加。寺内さん「昨年5月、コロナ以降、『L』を送ってほしかったが食べきれない」といふ相談が入って来るようになった。

「私たちの話を聞いてほしい」と。生活保護申請をためらう人が多い中で、一度きりの給付金では、借金は乗り切れません。手続費の懸念な定期的な支援金を、児童扶養手当などで運動した緊急の給付を、光熱費の減免を、など切実な声が届いた。寺内さん「じつと聞いていたのに収入が10万円しかない人がたくさんいる。普通の人が普通に働いて、ちゃんと食費が食えられて、子どもの進学も困らない夜を過ごさなくて済む世の中を」と訴えます。

相談急増

虐待、性暴力に遭った10



代の女性を支え、保護する活動をしているCo-abaの「藤井乃さん。コロナ禍で女性たちからの相談は2.5倍に増え続けています。」「藤井さんは「昨年5月の学校休校以降、あつてが相談が急増し、そこからベームが落ちない」と語ります。



「家賃下困難があり、学校やアルバイトなど家でいる時間を減らしていた子どもたちが、コロナで学校が休校になり、アルバイトも減る。親も困窮している。」「藤井乃さん、お金もなげなげに支出している女性を性的搾取を取り込む動きが激しくなっている」と指摘し、半端の負担が大きく、収入を求め、「性差別に入っていくのを嫌くないギリギリの生活」が描かれていると危機感を訴えています。

「自分から助けを求めてくるところの外に、危機的な路上に落ちている人たちを助ける手を探しています。」「私たちが手を伸ばす、ウトリチ、責任もある。本意に生活の底が抜けていって、愛情を奪われています。」「何層もの女性の貧困の実態を、コロナ危機はさらけだしました。」「藤井乃さん、児童は女性差別、性暴力の問題に興味がない」と矢張りを願いました。

給付一回

「コロナ危機の中で、政府の自派組織も含め社会福祉活動が停滞するも、」

田中野航、中野航、田中野航、中野航

「コロナ危機から国民の命と暮らしを守る。政権交代の実現は切迫した課題になっていきます。」